

鉄ぬ世

『鉄ぬ世』 あらすじ

太平洋戦争末期、島にアメリカ軍が近づくと、日本軍の隊長は島の住民に手榴弾を渡して自決をうながした。青年カンナは、いいなづけサンと逃げるよう母から促されるが、サンを残したまま、母と逃げる途中で日本兵の歩哨に殴られて気を失ってしまう。

そしてカンナは不思議な夢を見ることになる。それは、島の人々がまだ石器時代の暮らしをしていた時代に、海を越えて侍の落人が流れ着き、鉄の製法とその道具の存在を伝えられた昔の出来事だった。

夢の中にも現実にも現われるキジムナーの存在によって、カンナはそれが夢ではなく、マブイを同じくして異なる時代を生きているだけの「自分」の経験であることを知る。カンナだけでなく、サンや他の人物もまたそれぞれの時代で同じように生きていたのだ。

二十世紀におけるカンナは、日本軍の隊長により島の人々が自決を求められる状況で、歩哨の兵士が行方不明となり母が怪我をしている上にスパイの嫌疑をかけられるという、大変な困難と直面していた。

石器時代のカンナは、落人と島の人々のあいだで互いの調和を計る立場に鳴っていたが、それが島にもたらした変化が良いものであったのかという悩みを抱えることになっていた。

それぞれの時代のカンナは、同じように、サンと幸福になることを求めていたが、それぞれに困難が立ちただかっていた。それはカンナ個人の困難でもあったが、島と、そこに訪れた変化における困難でもあった。それぞれの時代のカンナとサンは、異なる時代の「自分」の経験を夢から学ぶことで、その困難に対処しようとする。

それは、島において時代を越えて貫かれていく大切な価値を守ろうとする決断へとカンナとサンを向かわせることになる。

本当に時代を越えていくものとは何か？

答えが最後に示されることになる。